手を巡る断想

福田 眞人

はじめにインドから

私が手を出そうとしているテーマは、手である。この手の、身体の部分を殊更に大きく取り上げて論じることはあまりない。手を拱(こまね)いていてはいけない。手に余るテーマとも思えない。

しかし、実際に取り組んでみると、実に壮大なスケールでの取り組みが必要であると知る。手練(てだ)れの人士でも、手中に収めたと思っても、どっこいそうは問屋が卸さない。上手の手から水が漏れる、ということになりかねない。濡れ手に粟とはいかないのである。

我々の身体には、大概、手がある。（薬害サリドマイド児が思い出される。[1]）腕の先についている、器用に仕事をこなす器官だ。生まれながらについている器官であるので、それが無いとどれほど不便かは、手の先についている親指同様、それが無くならないとわかりはしない。どの指でも同様。しかし、手の果たしている役割はおおきい。それは、脳の中で占める神経の割合の中でも、目と手（腕も含めて）が占める割合がとりわけ大きい事でも理解出来る。

私は、手の動きをじっと見ていた。別に、石川啄木のように、手を眺めて嘆いたわけではない。かの人口に膾炙(かいしゃ)した『一握の砂』の一首ではない。

はたらけど
はたらけど猶わが生活(くらし)楽にならざり
ぢつと手を見る[2]

現代人は、そんなには手を見つめない。恐らくは古代人も、そんなには見つめなかった。手が自然な身体の一部分でしかないからである。何千年と人々は、手を使い、おそらくそれ以前に人類が直立するようになってから手は常に重要な役割を担ってきたにもかかわらず。

それは、手が美しいからとか、女性の手であるから見つめていた訳ではない。

私は、デリーから深夜に車でダラムサラー（Dharamsala）に向かっていたその道すがらの、テントの野店で、まさに朝食を食べようとしていたのである。ダラムサラーでは、チベット仏教のタンカ（Thanka, Thangka）と呼ばれる曼荼羅・細密画の画家と、さらに宮殿にいるダライ・ラマ（Dalai Lama XIV, 1935–）に会う手筈だった。

テントの横、使い古した木の組板の上で、店の男は慣れた手つきで野菜を刻み、食パンをビニール袋から取り出して、後はチーズを薄切りにするだけになっている。野菜は洗われているのかどうかさえ分からない。ただ切り刻まれているその表面は奇麗に揃っているので、あたかも衛生的に見える。その手は、黒く、そして何よりもその爪には埃や垢がこびりついているように思われた。

私たちは、つまり私と若い美貌の秘書ナリーニさんと運転手は、チーズ・サンドイッチとチャイ（Chai, Masala chai, つまりティー、ミルク入り紅茶）を注文したのである。深夜に首都を出てから、埃っぽい高速道路を、と言っても、誰でも自由に出入りでき、自転車も手押し車も、そして

牛さえ自在に蠢いているような道を、時速百キロ以上で飛ばして来たのである。その道は必ずしも舗装されている訳ではなく、時にぽっかり開いた窪みにはまって、車は思わぬ方向に撥ねる。インドの高級車アンバサダーの後部座席のクッションは軟らかすぎて、客は天井にまで放り上げられる。つまり、天井で頭を打つ。鈍い音がするが、特段痛い訳ではない。

図1　チャイのサービス

テーブルにまずサンドイッチが来る。次に、注文もしていないサラダまで並んだ食卓で、ナリーニは手でサラダを払うようにする。チーズ・サンドイッチとチャイだけで十分だと言っている。店の主人は不満そうに腰を下げながらサラダを下げる。そこには、レタスと、トマトと、胡瓜、生の玉葱が無造作に切り刻まれ載せられていた。インドのサラダは、時に生の玉葱であることがある。

手掴かみの食パンは大丈夫なのかを考えている暇もない。しっとりとしたその食感、テクスチャー、味の濃いレッド・チェダーに似たチーズ。なによりも、長時間のでこぼこ道の後の熱いチャイは美味い。砂糖はきっとスプーンの三、四杯も入っている。それほど甘い。（インドでは、砂糖の消費量は半端ではない。全ての菓子も甘い。甘くなければ菓子として遇されない。）テントの横に無造作に置かれた大きなブリキの瓶から掬い出した水は、おおきなケットルに入れられ、火にかけられた。使い古したケットルは、あちこちに凸凹ができ、その材質さえもう窺い知れないほど黒ずんでいる。沸騰する湯の音がする。店の主人は、最後の味付けをするように、細かな屑のような茶葉を掌に載せて、湯の中に揉みながらぱらぱらと撒いた。茶壺の蓋に盛って、それを静かに放り込めばよいものを、主人はその黒い手に載せて、おまじないのように思いを込めて湯に投じたようだった。投げ込まれた茶葉は、真っ黒でその品種さえ分からない。アッサムなのか、ダージリンなのか、ニルギリなのか。あるいは、ただそれらの粉茶なのか。

そのようにして煮出された濃い紅茶にミルクとシナモンを投げ入れて更に煮たチャイは、最後にカップに入れられる。それも厚いビロードのような綿の布を通して濾される。それでも、どろっと濃く、無上に美味い。生姜や胡椒、カルダモンが投げ入れられることもあるらしい。とにかく胃の腑に染み渡る。たゆまない揺れと長い乾燥したドライヴの後で、身体が液体を欲していたのがよく分かる。

ようやくサンドイッチに手を出し、その塩気の効いたチーズの味わいを知った。

私はこの朝食で死ぬかもしれないが（なぜなら、危険な雑菌が満ち溢れているから）、それもいいだろう、この美味い紅茶をもう一杯飲んでおこう、と思った。店の親父に、「もう一杯」と注文した。案の定、男は無造作に横に置かれた甕からもう形さえ思い出せないカップで水を汲み上げ、今度は平鍋の中に入れて、沸騰させ始めた。殺菌だ、と思いきかせながら、次の温かくも美味い紅茶を待っていたのである。そして、投げ入れられる茶葉が、細かな粒子のような茶葉であることをまた確認した。屑茶葉である。

また別の場所で。

バラナッシ（Varanasi, Benares）のガンジス川（Ganges, Ganger）に身を投じてその水を両手で汲み上げ、口を漱ぎ、頭から行水する信者の姿に、呆然としながら、聖なる水を使う姿に心打たれる。朝三時にホテルを出て、すでに喧騒の渦巻く街路をけたたましいクラクションを鳴らしながらタクシーで、沐浴場であるガート（Ghats, Ghat）にようやくたどり着いて見た光景である。

手が掬う水の多さは限られている。せいぜい頭に掛ける一杯分くらいのものだ。それが何度も何度も繰り返されると、無限のガンジス川の水も、無限の容量となって注がれる。この付近の場所で、雑菌によって年

図２　ガンジス川の沐浴

間五十万人もの幼児の命が下痢で失われるとしても、この「聖なる水」（holy water）は「黴菌のない水」（germless water）なのである。

またここでは、過去四十五年間、右手を上げたままの聖者・苦行者（Sadhu）が沐浴に来る人たちから大変な尊敬を集めている。上げたままの右手は、筋肉が萎え、神経も役立たなくなり、指は固まり、爪は黒く歪んでいる。この聖者アマール・バラティ（Amar Bharati）氏は、普通の職業を捨て、家も家族も捨てて、ヒンデゥー教の神シヴァの信仰に生きるために、「浄」とされる天に掲げるように、天に向けて腕を突き出している。ウルダヴァバフ・ババ（Urdhvabahu Baba）という尊称をもらっている。「手を挙げている」という意味である。続けていることが敬虔とみなされ、彼の神聖な手に触れに信者がとめどなくやってくる。(3)

また、別の場所で。

私は、また手を見つめて、驚愕した。朝六時発の、デリー駅とアグラ駅を繋ぐシャタビ特急（Shatabdi Express）に乗車して暫くたった時のことである。この列車だけは、特に人気があり、タージ急行（Taj Express）と呼びならわされている。

一等車はがら空きで、我々家族四人と、もう一家族しか乗っていない。ほとんど貸し切り状態である。しかし、しっかり指定席が設けられていて、指定以外の席に座る事は想定されていない。

実は、その日の朝四時過ぎに起き出して、ホテルからタクシーでようやくデリー駅にたどり着いたのである。まだ周囲が真っ暗な駅舎に入る。まだどこにも電気も点いていない。歩もうとして、子供が歩みを止めた。一歩も前に進めないでいる。それは目を凝らせばすぐにわかる事だった。広い駅舎で、床一面に人々が寝ているのであった。有象無象の人達が、それこそ家族一塊で、そこここに寝そべっているのである。そして、誰もが通りかかる我々を、浮かない目つきで睨みつけているのである。それを飛び越えたり避けたりしながら、ついにプラットホームに出る。そこは無人だった。

やっと乗り込んだ特急の車内は、騒音を立てながらエアコンが効いている。インドの秋はまだ暑い。ホテルも列車も当然、効きすぎるくらいエアコンが効いている。まるでそれが富と権力の象徴でもあるかのように。

突然、車掌が来て、切符を切る。そして、それから二人の白い制服を着た乗務員が、カートを押して入ってきた。そこには白い食パンが積まれ、それ以上に何か銀色の寸胴鍋には、料理が入っているようだった。

料理を配膳する乗務員は二人。二人は、ごく当然の事のように食パンを手で掴み、子供二人に差し出す。それを止める事も出来ない。子供は、白いパンを受け取り、自分の皿の上に並べる。それは一瞬のことで、私は制止することすらできなかった。取ってはいけないと言いたかったが、止められなかった。肌黒い男性の手の爪には、どこでいつ付いたかもしれない垢とゴミがしっとりと付いていた。

私は、天を仰いでいた。しかし、カレーは美味い。実に味わい深い。

列車がアグラにいよいよ到着と言うとき、前の方に座っていたインド人家族が騒ぎ出す。列車の窓から外を見て、叫んでいる。両親も笑いながら外を指差している。それは、一時を同じ車輌で過ごした共同幻想を私たちに最後まで強いるような風情だった。私達も見ざるを得ない。

これが名高い列車の進行方向右側の男性、左側女性の、トイレタイムであった。顔を合わせるのが恥ずかしいのか、

図３　車中食の一例

一様に車輛とは反対側を向いている。そして、彼等は大概民族服のサリー（sari, 女性）とパンジャビ・スーツ（Punjabi suit, 男性）を着ているので、衣に余裕が有り、そのためにウンコ座りをしていると、自然と秘部は覆われて、まず外からは見えない。おそらくは見えないであろう。

ここで重要なのは、パンを配膳したり、食べたりする時には、右手を使い、排便の処理をする時は、左手を使わなければならないということである。それは「右手の文化、左手の文化」（Right-hand culture, left-hand culture）という言い方をされる。別にインド人が手を使って食べるから文化的に遅れていると考えない方がいい。ヨーロッパ人も中世までは、手を使って食べていた。〔安土桃山時代に来日したイエズス会宣教師ポルトガル人フロイス（Luís Frois, 1532–1597）は、「日本では箸を使い、ヨーロッパでは手で食べている」と書いている。〕その後、スープを飲む（食べる, to have soup）スプーンと似た働きをするフォークが考案され、肉切り包丁がナイフに発展するに至って、三種の食卓用金物カトラリー（cutlery）が揃ったのである。もちろん最初は、フォークもスプーンも木製だった。流石にナイフは、金属でないと切れ味に問題があったに違いない。しかし、今日でもなお世界の約三〇パーセントが手食の文化を維持している。

それゆえ、列車の中でパンを配ったボーイは、右手でパンを掴み客に配る必要があったが、列車の横で並んで用便をしていたインド人は、その処理を左手でする必要があった。（英国では食卓でパンを食べる際に、左手だけでパンを千切り、それを口に運ぶと言う習慣が無い訳ではない……。皿がある場合もあれば、無い場合もある。その際には、テーブルクロスの上で遠慮なく千切り、一面パン屑だらけにする。）

手を洗う

食事の前に、手を洗う。こんな習慣の人が少なくない。いつから人は手を洗うようになったのか。キリストは、食事の前に手を洗ったか？彼を処刑することを決めたローマのユダヤ提督ピラト（Pontius Pilatus, AD26–38在職）は、自分の罪を購うように、手を洗った。罪に手を染めたこと（神の子を殺すこと）をしっかりと認識していたのだ。

手を洗う。食事前、手洗い使用後に手を洗う事は相当習慣化している。「手洗い」は、便所を意味する。英語では、〔lavatory, toilet, rest room, powder room, washroom〕というが、この最後の〔washroom〕に近い。つまり、場所と行動が一致している。あるいは、排便排尿という生理的行為に、手洗いという行為が付随的に存在する。

用便をする前に手を洗うか、それとも済ませてから洗うか、議論の分かれるところである。それは、いささか枝葉末節にわたるが、清潔な手で用便をするか、用便後、手を洗ってそれに引き続く行為に、用便の際に手に付いた汚れをもたらさないか、と言う問題である。用便後手を洗い、食事をするという流れは首肯できる。

何時頃から、人は手を洗うようになったのか？長い生活の知恵で、洗えば疾病に苦しむ事が少ないと言う経験を得たのか。食中毒の概念も歴史的にどのような経緯が有るのか興味深い。垢や汗に塗れた身体を、川や泉で洗うようになったのは、それは痒みや痛みをとるため、和らげるためであったとすると、宗教的意味合いが付加される以前にすでに人間は手を洗っていたのか。今では、猿さえ芋を洗って食べる時代である。おそらくそれは、人間の営為を見て、その物まねをしたであろうと考えられる。（ちなみに、猿が両手を使ってした芋洗いは、京都大学の哺乳類研究センターのある宮崎県の辛島で始まったとされる。もっとも最初にその衝撃的場面を目撃したのは、研究員でも学生でもなく、彼らの炊事担当のおばさんだったという説がまことしやかに囁かれている。）

宗教的意味。それは今日なおイスラム教徒が、モスク（イスラム寺院）に入る際に、手を洗い、足も濯ぐことを考えると、清潔な身体で祈祷を捧げる事の意味を考える必要がある。

洗顔と同様に、手を洗うことは重要な意味があった。浄めるということである。実際、石鹸が安価で工業化学製品として製品化されるまでは、

あらゆる種類のものが手を洗うのに用いられた。それは、例えば木の灰であったが、灰汁（あく）はおそらく最古の洗剤であった。藁の灰も良い洗剤であった。動物の油脂も有効な成分だった。さらにローマ人は人の尿を使っていた。それはアルカリがタンパク質を分解する性質を利用したものである。今日、尿は健康状態を知るのに格好な材料であるが、それ以前にヨーロッパの中世を通して尿もまた重要な医学的診断に使用されていた。それは「尿視法」（uroscopy）とも言うべきもので、時にそれは「尿診断」（water casting）と言われた。尿の徹底した分類と命名の羅列。人は尿を飲んで、甘い尿の存在に気付いた。糖尿病（diabetes）の発見である。今日、尿は血液とともに、最も有効な診断材料である。

石鹸の発達史はそれ自体、人間の清潔に対する観念の変遷を告げてくれる。手を洗い、身体を洗い、洗濯する。清潔は、自ずと鮮明な色の服装とは異なる問題である。

手を巡る思い

目は口ほどに物を言い、という諺がある。意外と手には、この手の比喩、言及が少ないような気がするが、実は手の表情は豊かである。

手と言えば、すぐさま京都広隆寺の弥勒菩薩のなんともたおやかな手、ダヴィンチの素描、デューラーの素描、などが思い出される。そして、バレエの手・指先の表情を考えると、あらゆる洋舞や和舞のダンサーの指差す指の美しさを考えないわけにはいかない。オーケストラの指揮者の手はどうだろうか。全て手の表情にだけ支えられた芸術の表現ではないが、そこに手や指が果たす重要な役割がある。

すでに十八世紀のドイツの哲学者カント（Immanuel Kant, 1724–1804）が「手は外部の脳である」と述べたとされるが、その原典は不明である。

しかし、カナダの脳外科医・神経生理学者ペンフィールド（Wilder Graves Penfield, 1891–1976）のホムンクルス（Homunculus, ラテン語で「小人」の意）の図が示すように、全身の神経、脳に占める手に付随する動きの役割の非常に大きな部分が、目と手に使われているのである。確かに、手は露出した脳と言われ、西洋医学の中でも手は特化された分野であり、整形外科の中でも「手の外科」として早くから分離して確立されていた。[4]

図4　ホムンクルス

手は、実は脳が露出していると言われる程、神経が張り巡らされ、深く関連している。もちろん、手先の器用な動きは、脳との直結をすぐさま意識させる。

手は、しかしあらゆる医術、医療のために使われる。日本語の「手術」（surgical operation）という言葉はその基本的動作を表しているし、「手当て」（treatment）は、患者に医師が手を当てて治したということに由来するのであろう。手で施術をする者を英語ではハンド・ヒーラー（hand healer）と言う。

古代から存在したかも知れないハンド・ヒーラーの極め付けは、キリストその人であろう。キリスト自身が、奇蹟であろうとそうでなかろうと、手の効用について知悉していたのは、『聖書』での記述から明らかである。

キリストがまだ宗派が黎明期に有る時、その知恵を、また救済の道を人々に示そうとした際に、奇蹟こそもっとも効果的な方法であった。そして、それは水をワインに変えるとか、自ら湖の上を歩くと言ったことよりも、もっと身近な手を翳すこと、あるいは手で病者の患部に触れる事

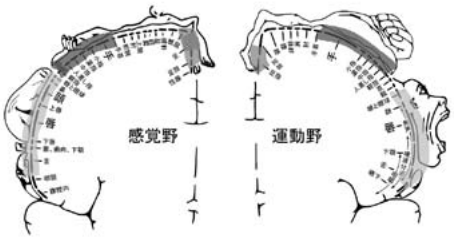

図5　脳の分野と人の対応

図6　Orazio de Ferrari (1606–1657), *Guarigione del cieco nato*,「生まれながらの盲人を癒す」Collezione D'Arte Della Banca Carige (Genova)

で癒す方が、もっと印象深く人間的に感謝されたと思われる。例えば、ハンセン氏病（癩病leprosy, Hansen's diseaseと思われる）患者の患部に触れて治す部分には特に威光が感じられる。

イエス或町に居給ふとき、視よ、全身癩病をわづらふ者あり。イエスを見て平伏し、願ひて言ふ『主よ、御意ならば、我を潔くなし給ふを得ん』

イエス手をのべ彼につけて『わが意なり、潔くなれ』と言ひ給へば、直ちに癩病されり。

（『舊新約聖書』「ルカ傳福音書」五章十二～十六、日本聖書協会、一九五〇年）

癩病の患處ある者はその衣服を裂きその頭を露しその口に蓋をあてて居り汚たる者汚たる者とみづから稱ふべし

その患處の身にある日の間は恒に汚たる者たるべしその人は汚たる者なれば人に離れて居るべし即ち營の外に住居をなすべきなり

若また衣服に癩病の患處起るあらん時は毛の衣にもあれ麻の衣にもあれ

（『舊新約聖書』レビ記十三：四十五～四十七、日本聖書協会、一九五〇年）

確かにキリストは、手当てをし、その患者を癒している。

この偉業・奇蹟がキリスト一人に限定されたものでなかったことは、歴史が示している。それは後の世の諸国の王が、自分の権威を示すために行った神的治療行為に類似する。それらは諸王が手当てを実行したもので、まさにローヤル・タッチ（Royal touch, King's touch）と呼ぶものであろう。ローヤル・タッチは、さしずめ日本語に訳せば「王手触れ」にでもなろうか。

ローヤル・タッチという政治的道具

ローヤル・タッチは有り体に言えば、神から神罰として疾病を貰い受けた患者に、神から特別の許しを得た王が、患部に触れることで病気を癒すという図式である。これは、まさに病気の原因が神の怒り、神の与えたもうた試練であるという考え方と共に、まさに治療する者は、神の特許を得て医療を施すということになる。そこに王（皇帝）が、神から特別授けられた力を発揮することとなるので、王権そのものも神が与えたもうたものであるという考え方、王権神授説（divine right, God's mandate）を補強するものとなる。

ヨーロッパの王家では、自分の王権が神から授けられたものであると吹聴するために、盛んに王手触れを行った。英語で「royal touch」、フランス語では〔touche royale〕と言われるものである。とりわけ、瘰癧（scorofula）に効果があるとされた。瘰癧とは、頸部リンパ節結核のことで、神から王権を授かったものは、この患部に触れるとたちどころにこの病を癒す事ができるとしたもので、それゆえに「王の病」（King's Evil, le Mal de roi）と呼慣らわされた。これは、まさに王権の正統性を示すためのもので、「王権神授説」の拠り所であった。

王様は、膝下に罷り出た臣民の首に金貨「お手触れ金」（touch piece）を載せ、その上から厳かに王手触れを行ったのである。

心の病や身体内部の病は、人々に大きな印象を残さないので、皮膚にその病症が明晰なものがよかった。キリストのハンセン氏病（と思われる、leprosy, Hansen's disease）の手触れによる治癒は、奇蹟として語り継がれる事となる。それは『聖書』の記述の中でももっとも印象深いものである。

おそらくフランク（現在のフランス）王国の初代の王クローヴィス（Clovis, 四六六—五一一）が四九六年に、ランスで行った手触れが最初だったとされる。

英国の王エドワード懺悔王（Edward the Confessor, 1003–1066）とフランスの王ルイ九世（Louis IX, 1226–1270）は、瘰癧を王手触れで治したとされる。このエドワード懺悔王の伝承を利用して自らの権威を高めようとしたのがヘンリー一世（Henry I, 1068–1135）である。

どのように王は患者に触れたかと言うと、直接触れないように患者の首には「お手触れ金」が置かれ、王は間接的に患部に触れたのである。また、その金貨を触れられた後、ずっと首からぶら下げると効果てきめんと考えられたが、実際には患者は高価な金貨を売って生活費にしたことが考えられる。一種の貴種の人から貧者への施し物とも考えられたのである。

シェークスピア（William Shakespeare, 1564–1616）の悲劇『マクベス』（Macbeth, 1606）第四幕第三場の中で、この神聖な力が讃えられているが、それがエドワードに始まるとされているのは、このエドワード懺悔王のことである。

英国では、この王手触れは重要な仕事、営みと考えられ、例えば清教徒革命の後で王位に就いたチャールズ二世（Charles II, reigned. 1660–1685）は、在位の間に総勢九二〇〇〇人もの瘰癧患者に触れた。一年に換算すると四五〇〇人にもなる。ある日を決めて多数に触れたのであろうが、一日換算にすると十二人以上であるから、容易い数字ではない。父チャールズ一世（Charles I, 1600–1649）のように斬首刑に処せられないように、人気取りのために儀式を取り行ったのであろうか。

この儀式は、アン女王（Anne, Queen of Great Britain, 1665–1714）が一七一二年三月三十日に最後に施して以降行われなかった。しかし、この最後の日に母に連れられて瘰癧の治療を施して貰ったのが、後の辞典編纂者ジョンソン博士（Samuel Johnson, 1709–1784）だったが、霊験あらたかでなかったのか、彼は終生瘰癧に苦しんだようである。

フランスでもこの儀式の流行は変わらず、ルイ一四世（Louis XIV, 1643–1715）は、一六八〇年の復活祭の一日だけで一六〇〇人もの患者に触れている。やがてフランス革命で断頭台に消えることとなるルイ一六世（Louis XVI, r. 1774–1792）は、一七七五年六月十一日の戴冠式の日だけで二四〇〇人もの人に触れたのである。もちろん、この王手触れは、ルイ一六世の処刑と共に消滅したと考えられたが、さらにさらにシャルル十世（Charles X, r. 1824–1830）は、その戴冠式の日一八二五年五月二九日に百二十一名の部下に王手触れを施している。それがフランスでの最後の王手触れだった。

しかし、今日なお、手触れで患者を治療しようとする施術者がいる。それはいわば中国語で言う所の「気」を送り、患部を癒そうとする試みである。

手と治癒、衛生という問題は、またもっと深刻な関係にあった。

医学においては、永い間、黴菌、雑菌という考え方がなく、病気の原因は面白い事に、無数にあった。例えば、神罰。宇宙の天体の航行に伴って漂う爛れた空気。地球の割れ目から地上に噴出する気体。動物の死骸から発する腐敗のガス。それは瘴気（しょうき）とも呼ぶべきもので、英語ではミアスマ、ミアズマ〔miasma〕と称された。

それゆえ、手が細菌を運び、手に触れる事で病気を、あるいは黴を相手に感染させるという発想がなかった。食事をし、祈り、身体を洗う手が、まさにその手が相手に病気を感染させるとは思いも拠らなかったのである。

手と産褥熱

一般にヨーロッパの産科では、妊婦の死亡率が高かった。出産は長い間危険な営為だった。産褥熱（さんじょくねつ）による死亡が後を絶たなかった。時に死亡率三〇パーセントを超えるようなこともあった。

ウィーン総合病院の産科では、妊婦が出産する際には、他の病室で

の診察や手術室でのオペ（手術）から回って来た医師が、立ち会って行った。外科や内科の医師が担当していて、産婦人科医の存在そのものがまだ不確実なものだった。その頃産科には二つのクリニックがあり、ゼンメルヴァイス（Semmelweis Ignác Fülöp, Ignaz Philipp Semmelweis, 1818–1865）は自分の担当する第一クリニックが産褥熱による死亡率が一三・一パーセント、他方第二クリニックではわずか二・〇三パーセントであることに疑問を抱いていた。

ゼンメルヴァイスは、時に外科手術の血を滴らせたまま、産科に入って来る医師を見ていた。彼は、直感的にそうした手の洗浄、消毒を考え、ただちに二組のグループに分けて、臨床実験を行った。

結果は明白だった。他の部局で診察なり手術をした医師は、産科に入る時に、カルキ（次亜塩素酸カルシュウム）で一様に消毒・洗浄するのと、そのままの手の状態ですぐさま次の産科の診察、出産をする場合と違って、産褥熱による死者は三パーセントに激減した。

彼の主張は、つまり「医者の汚染した手が産褥熱を伝染する」ということであり、産褥熱（puerperal fever, Childbed fever 小児病棟熱）は当時、産科の大問題であった。

ゼンメルヴァイスの出産に立ち会う医師は全員カルキによって手を洗浄すること、消毒することを主張した。しかし、ゼンメルヴァイスのこの画期的院内感染に対する対策は、大袈裟な反感と蔑みの対象となり、彼はやがて行き場所を失うに至る。彼の感染対策は、結局、多くの人医師に無視されるに至る。なぜなら、彼は多くの医師仲間を殺人者呼ばりしたのだから。

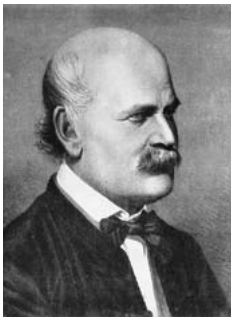
図7　ゼンメルヴァイス

彼の晩年は不遇で、精神を病み、同僚の医師に騙されて精神病棟に入れられて、拘束服に身を委ね、その消毒を唱導した手は、自由を失ったまま、死に至ったのである。

やがてゼンメルヴァイスの論文は、英国の外科医リスター（Joseph Lister, 1827–1912）に読まれ、手術の際に手を消毒することで細菌感染を予防する消毒法（disinfection）、殺菌法・滅菌法（sterilization）が医学界にもたらされた。

また、一八八九年にはルイ・パスツール（Louis Pasteur, 1822–1895）が化学会議の席上、「ゼンメルヴァイスが消し去ろうとしていた殺し屋は連鎖球菌である」ことを発表したのである。このようにしてゼンメルヴァイスは、院内感染予防の先駆者となったのである。パスツールも低温殺菌法（pasteurization）にその名を残している。

もしこの研究結果がもっと早く知られ、医学界に一大改革が起こっていたら、アメリカ第二〇代大統領ガーフィールド（James Garfield, 1831–1881）も敗血症（sepsis）で死ぬことはなかっただろう。暗殺犯に背後から撃たれた大統領の体内から銃弾を発見しようとして、医師が滅菌しない手で患部を探るために手を突っ込んだ結果、大量の膿を発生させる原因となったとされる。

クリミア戦争に志願して看護婦を派遣したナイチンゲール（Florence Nightingale, 1820–1910）は、その意味で衛生的看護の嚆矢となった。なぜなら、彼女こそ、一度使用されたガーゼを次の患者に使用する事を禁じ、新しいガーゼの使用を命じたからである。彼女の手当ての仕方は、それまでの「常識」と異なっていた。彼女は、これまでの時間を限定して行っていた看護を改めて、二四時間看護を唱導し「クリミアの天使」とも「白衣の天使」とも呼ばれた。いつも見回りの際に自分も看護婦（看護師）も手に蝋燭を携えていたことから、今日なお看護師修了の戴帽の儀式（the Capping Ceremony）では、修了生全員が両手で蝋燭の焔を支える。

彼女はまた、換気（ventilation）を称揚し、病室の明かりを明るくした。もちろん、換気を称揚することは、従来強かった瘴気説に異を唱えることであり、勇気の要ることだった。しかし、彼女は後半生四〇年近

くをおそらくは心気症に罹っていると信じてベッドに過ごしながら、手記を書くことをやめず、看護の改革に絶大な寄与をしたのである。

しかし、ナイチンゲールが主導し、多くの看護師（看護婦）がその後倣ったことは、体を動かし、患者に寄り添うことだった。看護の漢字の「看」は、「手」と「目」の合体であったことは、実に看護の要諦を得ていると言わなければならないだろう。

「清潔さを保つための水を用いた洗浄行為は、今日のわれわれにはあたりまえの習慣となっているが、過去においては必ずしもそうではなく、F. Loux の研究にみられる伝統社会の態度は今日とはまったく逆であり、洗浄はむしろできる限りせずに済ます行為、非日常に属する行為であった。きわめて脆いものであると見なされていた人間の肉体に無用に触れることは避けるべきことであった。とりわけ危ないと考えられたのは乳児の体で、これを包み、がんじがらめに巻きつけた当時の窮屈な産着も同じ考えの結果であった。そして、汚れ自身も一種の衣服のように体を覆い、これを保護すると考えられていたのである。肉体を動かした結果生じる汗や垢など の汚れは、当然、そこに存在する肉体の一部、外皮であった。したがってこれを洗い流すことは、特別の儀式的・祝祭的行為ですらあった。入浴や洗濯の日を限定するなどの洗浄にまつわるさまざまな禁忌がそれを示している」（フランソワーズ・ルークス（蔵持不三也―信部保隆訳）『肉体―伝統社会における慣習と知恵』）。

また、入浴、身体を洗う事に関連して、身体を洗う道具はと尋ねられて汗で洗い流すと答えたブルゴーニュの老人の話のように、汗そのものが汚れと見なされていたかどうかも疑問である（イウオンヌ・ウェルディエ著（大野朗子訳）『女のフィジオロジー』）。垢さえも聖なる証として、臭気をふんぷんとさせながら、神を説く聖人もいたのである。さらに極端に、排泄物の上に鎮座して、崇められていた聖人もいる。清潔が、むしろ精神の劣化であると考えた結果であったと考えるのが妥当であろう。清潔の観念は、かくも多様であったということである。

人魚（mermaid）は、物語の中で悲しい役割を演ずる。アンデルセンの童話の中では、特に悲劇的な要素が強い。人魚姫が人間に恋をし、報われないのである。

しかし、多くの船乗りが、海の中で見た人間のような姿は、恐らくはカリブ海、大西洋に棲むマナティ（manatee）であろう。胸に付いた鰭がまるで人間の手のように見える、海で悠々と泳ぐ巨大な哺乳類である。

おそらくそれで、人魚姫の神話ができた。ギリシャ神話に出てくる船乗りがセイレーン、サイレン（Siren）を恐れるように、またライン川を降る船頭たちがローレライの岩場でよく遭難したことからローレライ（Loreley）の妖精を畏怖したように、彼らは説明のつかないものに、名を冠し、そしてそれを語り継いだのである。

芸術の中に描かれたる手

宗教的創造物を芸術というのは相応しくないかもしれないが、京都広隆寺にある弥勒菩薩（みろくぼさつ）は、その清楚な笑顔で菩薩の情、慈悲を表しているとされている。正式名称は、弥勒菩薩半跏思惟像（宝冠弥勒）というらしい。しかし、その細いしなやかで優美な手は、また別の意味で表情豊かである。ドイツの実存哲学者ヤスパース（Karl Theodor Jaspers, 1883–1969）が、「人間実存の最高の姿」と賞賛したと伝えられるが、詳細は知らない。それ以上に、この手は国宝第一号の手なのである。そして、いささか旧聞に属するが、この手に恋した大学生がこの像に抱きつき、指の一部が破損したのである。弥勒菩薩の手に嫉妬した男が、その手を落とそうとして飛びかかったのであったという解釈もある。

弥勒菩薩の手の表情には、なんとも言えぬ穏やかな憐憫の情がある。また、和舞であれば、その身体全体の表現には、手もおおいにその表情や意味を添えているのであろう。手と指のたおやかさは、弥勒菩薩に女性性のみならず、慈愛の姿をさえ表象しているのである。格闘技の空手

チョップほどには令名を馳せていなくとも、和舞での手の振る舞い、洋舞での手先までの表情は何にもまして重要である。

弥勒菩薩の手は二本だが、慈悲にみちた観音は千手である。それゆえに無数の手を持した千手観音がある。この観音は千の手を持ち、慈悲の広大さを示しているが、またその千手の手掌には千眼があり、化導の智が満ちている。化導とは、衆生を教化して善に導くことを本意としている。

図８　弥勒菩薩の手、広隆寺（京都）

図９　千手観音、御室仁和寺（京都）

京都の三十三間堂では、一〇〇一体の千手観音が所狭しと並べられているが、大概の手の数は四二本のものが多いとされる。実際に千本の手を持つ観音像は、伝来の初期に作られたものに多い。例えば、唐招提寺の千手観音のように。

ミケランジェロ（Michelangelo di Lodovico Buonarroti, 1485–1564）のダヴィデの像（David di Michelangelo）は、フィレンツエの市庁舎ヴェッキオ宮殿の前に佇立している。その手には、青筋が浮いているようである。

それもその筈、ダヴィデは、イスラエル王国の統治者で、巨人ゴリアテとの戦いに挑み、今まさに岩石を投げつけんとしている場面である。その手には、緊張感が漂っているのが当然である。

一方、ルーブル美術館の華ミロのヴィーナス（Vénus de Milo）は、惜しむべきかな両腕がないので、両手もない。ないから余計に元の手の位置、捧げていたものなどが逞しく想像されるが、おそらくその手は、腕は、ダヴィデとは異なり、緊張感もなく女性らしい血管の浮いていない手であったろう。男女の身体の違いは、胸や腰だけではなく、先端の手にも大きな差異を生じているのである。またその手の先の指、爪にも独特の違いがある。細い指、尖った爪などが想像され、さらにマニュキュアといった化粧の施しもあったかも知れない。

図10　ダヴィデ
アカデミア美術館（フィレンツェ）

図11　ダヴィデの手（同上）

バレエでは、流れる身体の線の先端に指先があり、それが指し示しているものこそ、天であり、愛であり、ヒロインの行く末である。同様にどのような舞踊、ダンスでも、手と腕の動きは重要な役割を果たす。芸術の表現方法の一つである。

手は、敬礼に使われる。また、信仰の表れとして、手を重ねる。時に、尊敬と信仰を表すのに、腕と手を胸に置く。時に、握り拳で、胸倉を叩くのは、感動と意気高揚のためである事がある。

そして祈る事は、つまり心身共に神に身を委ねる事である。

手を組み合わせる事の意味合いは、左右の統一のみならず、心身の統一、天と地との合一など、幅広い。

しかし、左右の合一とは、つまり陰陽の合一か。白黒の合一とまでは言えないが、人間が左右に持っている手が、人間を人間たらしめたことを考えれば、左右の別の意識がそこで一瞬であれ統合されるのであるから、大きな一致と見なければならない。

つまり祈りに手は欠かせないのである。

崇敬の念、驚愕の念、至上のものに対する畏怖の念。……その時、人は自然に手を合わせる。

崇敬を求める際、キリスト教の聖人は悉く手である形を示す。まるで仏教で念を入れ、印を結ぶように。印指の形が仏や菩薩の悟りや、時に誓願の内容を指し示したように。密教では特に重んじられ、印を結ぶ事、その型に通暁することは、悟りへの修業の第一の要諦であった。

例えば、ダヴィンチ（Leonardo da Vinci, 1452–1519）の素描に見られる女性の手は美しい。彼は、それを素描の練習として描いたのであろう。多くの顔、姿、波、雲、嵐を描いたように。

ダヴィンチは、左利きであったためか、ほとんどの手稿が鏡像文字（mirror writing）で書かれている。左利きであったので、右から左へと通常と逆の方向に書く方が楽だったとの推測もあるが、また別に手稿を読まれないための方策であったという意見もある。かれの一三〇〇ページにも及ぶ手稿は全て鏡文字で書かれている。ダヴィンチは書いている、「その手に魂が込められなければ、芸術は生まれない」と。（鏡像文字の実行者には、ルイス・キャロル Lewis Carroll, 1832–1898 がいる。）

手を、明確な意図をもって描いた人物に、ドイツの版画家デューラー（Albrecht Dürer, 1471–1528）がいる。

図12　ダヴィンチ、「ジネヴラ・デ・ベンチの肖像」の習作（英国ウインザー王室図書館）

図13　デューラー「祈る手」アルベルティーナ美術館（ウィーン）

この版画を先入観なく見れば、信仰の手である。天上の神に敬虔に祈る手である。しかし、この版画の背後にはもっと異なる物語がある。言い伝えか、俗信か。

この絵は、実はデューラーの友人ハンス（弟のアルベルトという説も）の手である。二人は貧しい家の生まれで、共に版画家になる夢をもって、ニュールンベルクの版画家の許で修行していた。貧しいために働きながらの修行だったが、共倒れになることを恐れたハンスが、一つの提案をした。ハンスが働き、その資金を基にデューラーが版画の修行を続けるというものだった。その役割分担に従って、デューラーはヴェネチアに行き、立派な版画家になって故郷に戻った。ハンスに入れ替わりにヴェネチアに行って修行してもらうためである。

手を取り合って再会を喜んだ二人だったが、ハンスの力仕事で汚れ歪んだ手を見て、デューラーは泣き崩れたと言われている。変形した手は、もう二度と絵筆や彫刻刀を持つ事が出来なかったからである。しかし、その手でハンスは一生懸命祈りを捧げていた。その手こそ、デューラーが素描で描いた、友情と感謝の「祈る手」（Betende Hände: Studie zu den Händen eines Apostels, 1508）である。（実際には、彼は貧しくなく、またヴェネチアに遊学していないのだが……。）

デューラーは銅版画の下書き（素描）を数多く残しているが、最も有名なものは一五〇八年に作成された『祈る手』である。それはヘラー祭壇画（Der Heller Altar, 1507–1511）の十二使徒を調査したものである。

デューラーは、一五二八年に、『人体比例に関する四書』（*Vier Bücher von Menschlicher Proportion*）を書いている。そこには次のように記されている。「わたしは形態と美の完璧さはすべての人間の総和のなかに含まれると考える」。

彼は、もう一つの手を描いている。それは「手と聖書」（Hände mit Bibel, 1506）という作品である。あたかも敬虔な手だけが、聖書に手をかける権利を有していると言わんばかりの見事な素描である。読み込まれた分厚い聖書は、その手によってより意味を持たせられる。その手も、生活の匂いがする。

図14　デューラー「手と聖書」（個人蔵）

一方、日本でも手を歌った詩歌は枚挙に暇が無いが、夭折した石川啄木（一八八六―一九一二）のこの歌はとりわけ人口に膾炙している。すでに冒頭で述べたが……。

はたらけど
はたらけど猶わが生活（くらし）楽にならざり
ぢつと手を見る

石川啄木の歌集『一握の砂』に掲載されたこの一句は、明治の普通の市民の生活苦を手に擬えた歌として知られる。

啄木は、この作品を明治四三（一九一〇）年七月二六日に詠んだと言われている。前年、東京朝日新聞に校正係という職を得て月給による生活を始め、家族を函館から東京へ呼び寄せたばかりのことであった。しかし家では嫁姑の折り合いが悪く、家庭の雰囲気は悪かったようだ。彼らはいずれ皆、結核で死に絶えることになるので、家族の幸福の時は短かった。

この歌をうたった時、啄木は心の中で、日本社会が孕む矛盾、政治的矛盾、階級的矛盾を如実に感じ取っていたのかも知れない。彼は、ロシアの無政府主義者クロポトキン（Pjotr Aljeksjejevich Kropotkin, 1842–1921）に親近感を抱いていたが、実際、世には象徴的に「女工哀史」があったのであり、その女工たちは安価な賃金で、産業化の特徴としての繊維工業で活躍していた。それは、女性たちの手が、細かな生糸産業の紡績や織布に向いていたからであり、例えば日本では当初士族階級から選ばれた女工たちが派遣されたが、やがて遠くの田舎から農民の子女が派遣されるようになり、彼女らは簡易な（しかし牢獄に近い）宿舎住まいの安月給、栄養価の低い簡易食事、暗く塵の舞散る劣悪な労働環境で長時間働かされたのである。彼には、そうした状況に同情する素地があった。女工は英語では［millhand］と呼ばれる。

石川啄木は、そんな時に尊敬する高村光太郎に会いに行く。そこで手に注目する。貧困と家庭不和に喘ぐ自分と違って、洋行して彫刻に詩歌に才能を開花させている男の手は大きく感じられたのであろうし、また実際高村の手は大きいので有名だった。啄木は、いかにも小さい自分の手をじっくり見る事しかなかったのではなかったか。

手が白く
且つ大なりき
非凡なる人といはるる男に会ひしに

何人かがこの手のモデルとしてあげられているが、啄木が「非凡といはるる人」を「男」と呼んでいることから、高村光太郎以外には考えられない。啄木は高村光太郎については、親しげに「新詩社中で予の最も服して居る高村砕雨君」などと呼んでいるから、旧知の間柄であった。砕雨は光太郎の雅号である。

その光太郎は、彫刻家（木彫）として才能を開花させつつ、新詩社にも早くから加入し、雑誌「明星」に短歌、戯曲、詩、翻訳などを載せて、石川啄木、平野万里等とともに、俊秀として注目されている、まさに「非凡なる人」であった。

光太郎は、フランス留学（一九〇六―一九〇九）からの帰国後、貧しくて彫刻のモデルも雇うことができなかった。仕方がないので、自分自身の手をモデルにして、彫刻を試みていた。フランスで見たロダン（François-Auguste-René Rodin, 1840–1917）の作品が彼に影響を与えなかったはずはない。

図15　高村光太郎「手」
国立近代美術館（東京）

そんな高村が、造形を考えるうちに浮かんだのは、若い頃に見た仏像の手であった。「手」（一九一八年頃）。観世音菩薩の手の「施無畏（せむい）」と呼ばれる形は、菩薩の異名であり、世界の如何なるものも

畏れずことなく受け容れる。右手は三鈷杵（さんこしょ）を持ち、左手には与願印を結ぶ。

その高村光太郎のアトリエを石川啄木が訪れたのは日露戦争中（一九〇四―一九〇五）のことで、光太郎の詩『暗愚小伝』の中の「転調　彫刻一途」に次の一節がある。

「いつのことだか忘れたが、
私と話すつもりで来た啄木も、
彫刻一途のお坊ちゃんの世間見ずに
すっかりあきらめて帰っていった。
日露戦争の勝敗よりも
ロヂンとかいふ人の事が知りたかった。」

啄木は、ロダンに憧れ、しかしそのロダンが何にも増して手を造形していた事を知らずに、自らの手を詠み、また光太郎の手を詠んでいたのである。

ところで「我を愛する歌」の章では、啄木は人物を詠うのを目的とはしていなかったので、この歌も高村光太郎という人物を詠うのがテーマではなかったはずである。

何を詠みこんだのか。かねてより敬意を抱き、ぜひ会ってみたかった人物とようやく会したのに、あまり互いに心を通わすことできなかった。ただ「白く且つ大」なる手が印象に残ったのであろう。偉大な人物だけに、その手がより迫力をもって迫ってきたのである。

図 16　Lodin, *La Cathédrale, L'Arche d'Alliance*, Museé Rodin (Paris)

ロダンの、この「大聖堂」（*La Cathédrale, L'Arche d'Alliance*, 1908）は、実は二つの右手が組み合わさって一つの空間を形成している。身体の一部しか表していない二本の手の先が組み合わさることで、一つの宇宙を表しているのである。あるいはそれは、二人の人間の信頼、愛情、結びつきを表象しているのかもしれない。二人は、男女なのか、同性なのか、はたまた神の手なのか。ヨーロッパでは中世には神は手によって表現されていたという。ロダン六十八歳、最晩年の作品である。最初大理石で彫られ、後にブロンズ、石膏で型を取られて別のヴァージョンができた。

高村光太郎が会いたかったロダンは、無数の手の彫刻を残した人物である。父親の高村光雲は、フランス留学中にロダンに会っている。ロダンは、それまでの彫刻が身体全体か、せいぜい半身であったのを、実に手という部分に特化して彫刻を造形した。手に表情を求めたのである。ロダンが手を発見したことは、近代への一つの視点、視線の変化だった。

そのロダンを愛し、ロダンのもとで秘書を務めたリルケ（Rainer Maria Rilke, 1875–1926）は、手を神の恩恵、恩賞として示した。その詩はこのように読める。「秋」（Herbst）

Herbst
Rainer Maria Rilke, 11.9.1902, Paris

Die Blätter fallen, fallen wie von weit,
als welkten in den Himmeln ferne Gärten;
sie fallen mit verneinender Gebärde.

Und in den Nächten fällt die schwere Erde
aus allen Sternen in die Einsamkeit.

Wir alle fallen. Diese Hand da fällt.
Und sieh dir andre an: es ist in allen.

Und doch ist Einer, welcher dieses Fallen
unendlich sanft in seinen Händen hält.

秋
ライナー・マリア・リルケ
一九〇二年九月十一日パリ

葉が落ちる、まるで遠くからのように落ちる
大空の庭が枯れたように
葉は拒む姿をして落ちる

そして夜夜には、重い地球が
全ての星の群れから孤独へと落ちる

われわれは皆落ちる、この手も落ちる
ほかをご覧なさい、すべての中に落下がある

しかし一人がいて、この落下を
両手で限りなくやさしく支えている

リルケの詩の中では、手が我々落下する、あるいは堕落する人間を優しく包み隠すような偉大な存在、神、キリストを象徴的に示しているの

である。あるいはリルケは、ロダンのこの手の彫刻を見て、このような思いに至ったのかもしれなかった。二人は、そのように精神の交流を芸術や宇宙の高みにまで持ち上げたのである。

それは、例えば、英国の画家ターナー（Joseph Mallord William Turner, 1775–1851）が、それまで万古永久に存在していた空の光と雲を営々と描いたように、またその絵を評価し、おそらく雲に関する最初の随筆を書いたであろうラスキン（John Ruskin, 1819–1900）のように。[5]

手の発見、新しい発見

全てはそこにあったのが、それを誰かが指摘し、論評するまでは、ごく普通に存在するものの一つにしかすぎないのである。存在するのに、気づかれない、あるいは表現の対象にならないという事実。

しかし、一旦、指摘され、描かれると、俄然新しいものとして我々の前に立ち現れて来る。まるで全く新しいものが発見されたように。

例えば地球を見てみよう。太古から雲も光もスイスのアルプス山脈もあった。しかし、それを人々は当然のものとして受け取り、あえて表現しなかった。ターナーは、光と雲を表現し、ついには光に満ちた絵画を遠慮なく生産した。彼はそれを発見したのみならず、その光に魅せられて、ついに埋没したのである。アルプスは、牧童たちが羊を山間において育てるだけのための土地だったが、むしろ（遭難や死や呪いの宿る場所としてのアルプスは）恐怖の対象だった山岳が、ロマン主義の台頭によって、憧れの土地と化し、世界中から山岳を求めてスイスに観光客が殺到したのは、そこに山岳の発見があったからである。（勿論、高地の冷気が肺病・結核に良いという山岳サナトリウムがこの流行に少なからず寄与したことは否定できないだろう。）

余談ながら、既に太古の昔から、人々は既にアルプスの山を超えていた。一九九一年にイタリアとオーストリアの国境近く、エッツ渓谷で発見された通称アイスマン、愛称エッツィ（Ötzi）は、驚くべきことに紀元前三三〇〇年頃（今から五三〇〇年前）にアルプスを越えようとして何者かに殺害されたのである。その氷詰めだった遺体は、古代の史実を我々に如実に語りかけてくる。

ローマ帝国を恐怖に陥れた北アフリカの商都カルタゴの将軍ハンニバル（Hannibal Barca, 247BC–183BC）もまた、大変な犠牲を払ってアルプス越えをしてローマ帝国を震撼させたが、最終的にはカルタゴは敗れて、壊滅した。人々の山岳への恐怖は、そこに宿る神の怒りであったかも知れない。彼に倣って、ナポレオン（Napoléon Bonapart, 1769–1821）もまたアルプス越えを実行した人である。[6]

手は、それゆえに、首や項や、乳房や腰や臀部ほどには強く意識されていないかも知れないが、逆にその意味を深く探れる縁ともなる。

手は我々の身体の一部にしか過ぎない。しかし、それは大きな一部である。

今日、機械化が進み、インターネットが普及して、いよいよ手の機能がより複雑で細かな作業を要求されている。

世では、体全体を使うダンスから、ついに指と手だけを使う、フィンガー・ダンスが、世界中の Tik Tok の間で流行している。指の動きだけで表現するパーフォーマンスであるタッティング（tutting）[7]で日本人が世界に名を馳せているとか。その世界選手権さえあるという。それは、一種、ストリート・ダンスがもっと縮小された、それでいてリズムと微細な動きを要求される新しい身体運動と言っていいのだろう。手はまだまだ人間に有用な、これからも使われ続け、発見され続ける道具なのである。合図のための、表現のための、そして何よりも生存のための。[8]

左利きに天才が多い等という神話はここでは論じる紙幅が尽きた。またの機会に譲ることとしたい。

注

（1）サリドマイド（thalidomide）は、催眠作用と催奇形性を持つ化合物。一九五七年に発売され、世界規模で薬害サリドマイド禍を引き起こした。日本では一九六二年に販売禁止になっている。被害者はドイツ三〇〇〇人、日本三〇九人、アメリカ数名、イギリス四五〇人等。世界全体で約三九〇〇人とされる。その後、癌やライ病に治験が認められ、製造が再承認された。身体の四肢がないか短く、手足が直接胴体についていることからアザラシ肢症（phocomelia）と呼ばれた。

（2）この一首は石川啄木『一握の砂』に掲載されて一九一〇年（明治四十三）年に東雲堂書店より刊行。啄木は、この作品を明治四十三（一九一〇）年七月二十六日に詠んだと言われている。その歌集題名は「いのちなき砂のかなしさよさらさらさと握れば指のあひだより落つ」によっている。

（3）手だけが聖者になる方法ではない。例えば後方歩行だけを何十年と続けて尊敬を集めている行者もいる。同様の行を続けたキリスト教の行者としてよく聖シメオン（Saint Simeon Stylites, 三九〇?—四五九、登塔者聖シメオン）が挙げられる。名前の通り、塔の上に三十五年間立ち続けて信仰の強さを示したとされる。模倣する者が後を絶たず、その影響の強さが読み取れる。悪臭のする排泄物の中に居続けた聖者もいるが、ここでは触れない。

（4）ホムンクルスとは、ヨーロッパの錬金術師が作り出す人造人間、及び作り出す技術のことである。

　製法はルネサンス期の錬金術師パラケルスス（Paracelsus, Theophrastus von Hohenheim, 1493–1541）の著作 *De Natura Rerum*（『ものの本性について』）によれば、蒸留器に人間の精液を入れて（それと数種類のハーブと糞も入れる説もある）四〇日密閉し腐敗させると、透明でヒトの形をした物質ではないものがあらわれる。それに毎日人間の血液を与え、馬の胎内と同等の温度で保温し、四〇週間保存すると人間の子供ができる。

　ホムンクルスは、生まれながらにしてあらゆる知識を身に付けているという。また一説によるとホムンクルスはフラスコ内でしか生存できないという。パラケルススはホムンクルスの生成に成功したとされる。しかし、彼の死後、再び成功した者はいなかったという。

　ドイツの文人ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe, 1749–1832）は、自身が生み出した戯曲『ファウスト』（*Faust. Der Tragödie*, 1833）第二部第二幕の中でこのホムンクルスを題材に取り上げている。

　キリスト教では、この技術は創造主である神・ヤハウェの領域に人間が足を踏み入れるものとして恐れられている。（Wikipedia 参照?）

（5）皮肉なことに、新しいものの発見に悠然と立ち向かったラスキンも、結婚したばかりの新妻には手も触れなかった。その初夜に見た身体が、自分のこれまでの思いと違ったというのがこれまでの説である。それが新妻の恥毛であったという現代の読みと、さらにそこに体臭（BO, body odour）という考え方もある。新鮮なものに敏感であったラスキンが、女体に戸惑ったのは不思議なことだ。あまりに生々しすぎて、芸術論にまで消化できなかったのか。あるいは、思弁の世界と、生身の認識は別だったのか。身体の一部へのこだわりは面白い。

（6）ダヴィッド（Jacques-Louis David, 1748–1825）の絵での勇ましい悍馬に乗っての山越えと違って（『ベルナール峠からアルプスを越えるボナパルト』*Bonaparte franchissant le Grand-Saint-Bernard*, 1846）、ナポレオンは実際にはロバで越えたとされる。その意味で、ドラロッシュ（Paul Delaroche, 1797–1865）の絵『アルプスを越えるボナパルト』（*Bonaparte franchissant les Alpes*, 1848）の描写が正しいと言える。ナポレオンは、ダヴィッドの絵では、身体が馬に比べて圧倒的大きく、この比率を崩すことでも、自分の姿を偉大に描かせたことが分かる。反対に、ドラロッシュの絵では、意図的にかへりくだった姿で描かれている。

（7）タット〔tutting〕とは、腕で形を作り出すことだったが、それが指で行われたことによる。とりわけ四角形の形を作り、それを移動させたり変形させたりする動きが主だった。それに対してディジッツ〔Digitz〕とは、デジタル〔digital〕に由来する言葉で曲線的な動きを主として、波のような動き（ウェーヴ〔wave〕）を作る動きをさす。

（8）手の指が創造性を育む?

　創造性は脳で生み出されることから、手の指と創造性も密接な関係があると考えられている。イギリスの研究者が子供を観察した結果、身振り手振りの多い子供ほど創造的なアイデアを多く思いつくという結果が得られた。この実験に対してヨーク大学の心理学者 Elizabeth Kirk 氏は「手の動作が物体の属性や持ち方、大きさ、形などを想像することにつながり、それによって創造的なアイデアを生み出すのではないか」と述べている。

　つまり、有り体に言えば、子供の創造性を育むためには手をどんどん使わせるのがよいと考えられる。また、この実験内容に加えて追加実験として一部の子供たちに手を動かすことを促した結果、手の動きの量と創造的なアイデアの量が比例したという結果も得られたようである。このことから、アイデアを考える際に手で何かを触って刺激を得ることが有効であると言える。

〔Jessica Stillman（和田美樹訳）『科学が証明：超シンプルなあることで子どもの創造性が伸びる』 lifehacker（二〇一七年二月七日）（https://www.lifehacker.jp/2017/02/170207_child_creative.html）〕